

自然対話における談話標識の表出と調整機能

安齋 有紀（青山学院大学非常勤）

フランス語の自然対話において、共発話者（発話相手）の理解の度合いを確認したり、話の進行上で必要とされる情報の調整が行われる場面では、談話標識 *tu vois* または *tu sais* が用いられる。その状況と同じような場면을日本語の自然対話資料で調べると、指示対象と話し手／聞き手の領域を表すコソア系の指示表現や、話し手が聞き手と共有していると判断する事象の提示／想起を促す「さ」、「ほら」などの標識の使用がみられた。その結果から、フランス語の2つの標識の場合は、発話者が自分にとって調整が必要と判断し、さらに共発話者にとっても必要であると想定した調整領域（何についてどの程度調整していくか）へのアクセスを表現していると考えられる。その場合、発話者間には共有できる領域があることが前提とされ、これらの標識は、発話者が対話進行中に、ある調整領域から別の調整領域へ、共有領域を目指して移行する時に現れていると言える。本発表では、*tu vois*, *tu sais* のそれぞれの標識の周辺にみられる言語現象（活動）・言語要素、さらに日本語のいくつかの言語標識の用法から、2つの標識が示す調整領域を考察し、発話者が共発話者を発話の対象の共有化へと導く過程に表出する談話標識の調整機能について説明する。